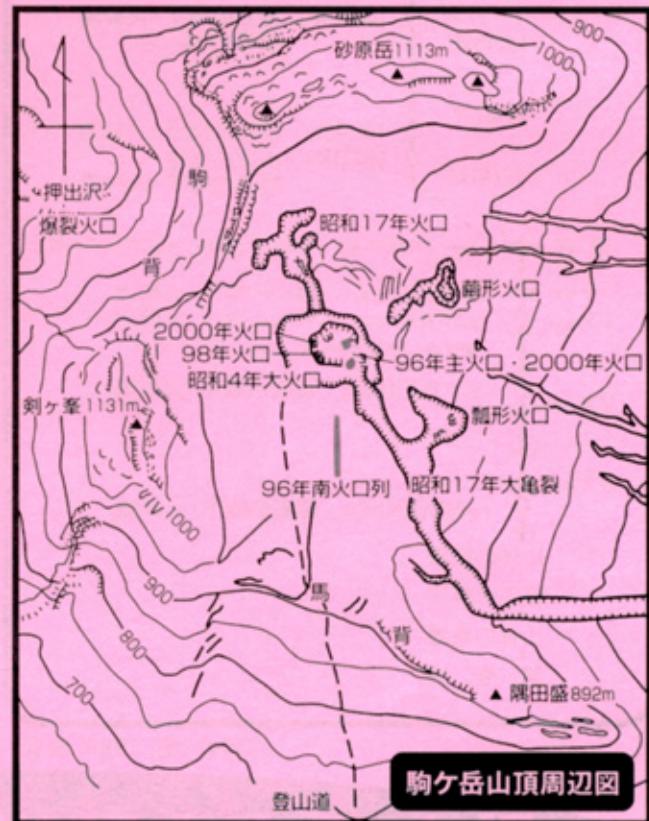


駒ヶ岳火山の概要

北海道駒ヶ岳火山(以下駒ヶ岳)は、国定公園にも指定され、美しい景観で有名です。しかし駒ヶ岳は激しい噴火をする活火山としても知られています。

駒ヶ岳はおおよそ3万年以上前に溶岩や火碎流などを噴出して以来、噴火を繰り返して現在の形となりました。頂上部には、北側の砂原岳、西側の剣ヶ峰、および南側の隅田盛があります。1640年の噴火では南と東に相次いで火山体の一部が崩れ落ち、南山麓では低地を埋めて大沼や小沼とそれ等の中に点在する島々ができました。また東に崩れ落ちた山体は内浦湾に達し、大津波を起こしました。この噴火で山頂部には馬蹄形カルデラと呼ばれる凹地ができました。しかしその後の3回の軽石噴火によって凹地はほとんど埋められ、現在は直径約2kmの火口原となり、かろうじて凹地の上部のピーカだけが砂原岳などとして残っています。

火口原内には中央に1929年の火口(昭和4年大火口)があり、そのほかにも複数の火口があります。火口原を横断して延長約1.6kmの割れ目は1942年の噴火で生じました。また1996年3月の噴火の際には昭和4年大火口南側にほぼ南北に約200m、幅1~2mの新しい割れ目が形成されました。これらのうちいくつかの火口では現在弱い噴気活動を行なっています。



駒ヶ岳火山噴火の歴史

駒ヶ岳は3万年以上前に成層火山を形成してから現在に至るまで、少なくとも3回の山体崩壊と9回の軽石噴火を起こしていることが噴出物を調べることによってわかっています。古文書の記録にある噴火は1640年をはじめとして大小合わせて二十数回あります。この中でも1640年、1694年、1856年、1929年の4回の噴火は**火碎流**を伴う激しい噴火でした。

1640年(寛永17年)の噴火では最初に火山体の一部が南と東に崩れました。東に崩れた火山体の一部は内浦湾に流入し、津波を起こし、700人以上の死者を出しました。その後噴火は激しい軽石噴火へと移り、軽石が降り注ぎ火碎流も発生しました。この噴火で降下した軽石は森町で100cm以上も積もりました。1640年の軽石噴火は1929年の噴火に比べ数倍も大きなものでした。

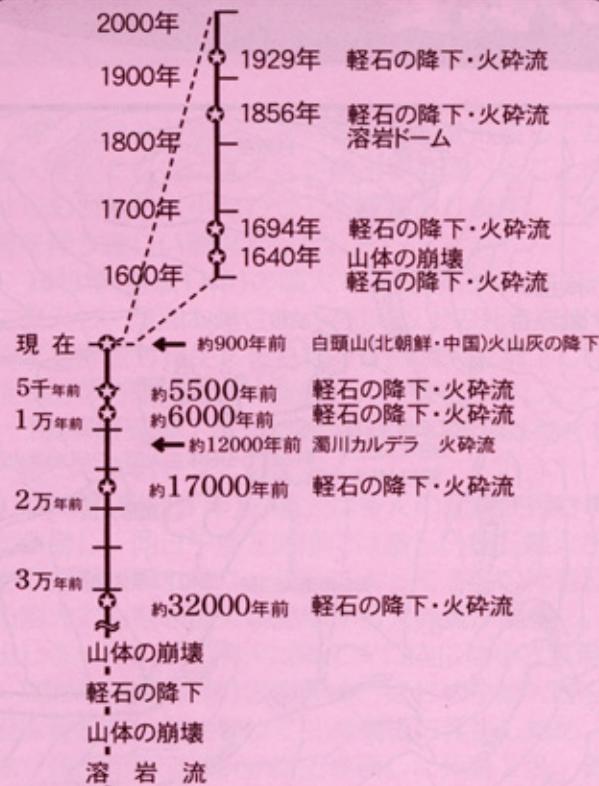
1694年(元禄7年)の噴火は詳しい記録は残されていませんが、東麓の鹿部漁業センター付近では200cmの降下軽石を堆積させています。

1856年(安政3年)の噴火は多くの記録が残されています。それによれば、8月26日の早朝から山麓で地震が頻発し、同日午前9時頃には激しい軽石噴火が始まり、約6時間くらい続きました。東山麓では約60cmの厚さの軽石が降り積もり、これによって2名の死者及び多数の負傷者を出し、17軒の家屋が焼失しました。またこの噴火でも軽石噴火の途中から火碎流が発生し、火碎流は南麓の折戸川をせき止め、留の湯で約20人の死者を出しました。この噴火以降に火口内には小さな溶岩ドームが形成されました。

1929年(昭和4年)の噴火は、はじめ小噴火から始まり、9時間後に激しい軽石噴火へと移行しました。火碎流は軽石噴火が始まって3時間後に発生し始め、軽石噴火は14時間継続しました。この噴火では降下軽石堆積物が鹿部市街で100cm以上堆積し、死者2名・負傷者4名を出しました。そのほかに家屋・家畜・耕地・漁場に大きな被害を出しました。この1929年噴火前の20年間には小噴火が多発しています。

1942年(昭和17年)の噴火では、山頂の火口原に長さ約1.6kmの大亀裂を生じました。また記憶に新しい1996年の小噴火は上に記した4回の噴火に比べると非常に小さいのですが、この噴火により、1929年火口の南側に新たな火口列を形成しました。1996年の小噴火では火山灰が風下に少量積もっただけでしたが、山頂に積もった火山灰がその後の大雪で泥流として流れ出し、農地や家屋に若干の被害を出しています。その後、1998年に1回、2000年に4回小噴火(水蒸気爆発)をしていますが、被害はありませんでした。

駒ヶ岳の噴火史



(勝井・他、1989、改変)

歴史時代の噴火史

西暦(邦暦)	規模	噴火に伴う前兆現象の記録
1640年(寛永17年)	大噴火	山鳴り著し
1694年(元禄7年)	"	記録不明
1765年(明和2年)	小噴火	記録不明
1856年(安政3年)	大噴火	2日前から鳴動、数時間前から振動を感じ、少量の降灰あり
1888年(明治21年)	小噴火	特になし
1905年(明治38年)	"	2日程前から鳴動を感じ、小爆発が起こり2~3日ごや大きな爆発となる
1919年(大正8年)	"	噴火の前日午後に駒ヶ岳付近で地震及び鳴動あり
1923年(大正12年)	"	特になし
1924年(大正13年)	"	約30分前から鳴動あり
1929年(昭和4年)	大噴火	2~3日前から鳴動、10~13時間前に地震あり小爆発にいたる。小爆発開始後9時間30分で大噴火が始まる
1937年(昭和12年)	小噴火	2日前からときどき鳴動や少量の降灰あり
1942年(昭和17年)	中噴火	4~5日前にドーンという音響を聞く、30分前に小地震を記録する
1996年(平成8年)	小噴火	特になし
1998年(平成10年)	"	特になし
2000年(平成12年)	"	特になし・4回小噴火を繰り返す

駒ヶ岳火山防災会議協議会の活動

1977年に対岸の有珠山が噴火し、そのとられた広域的な火山防災対策の経過から、1979年に駒ヶ岳の火山防災対策を周辺町村で協力して行うべきだということが、地域の防災関係者で話し合われ、駒ヶ岳の山麓に位置する「森・砂原・鹿部・七飯・南茅部の5町」が協力して一体的な対策を行うことが望ましいとの結論に達し、1980年に5町により「駒ヶ岳火山防災会議協議会」を設置し、「防災計画図(ハザードマップ)」を2種類(危険区域及び交通規制、避難場所及び避難道路図)を全国に先駆け作成しました。同時に、この防災計画図に基づいた「駒ヶ岳火山噴火地域防災計画」を策定し、静かな時に、将来の噴火災害に備えるということで、各種の火山防災対策事業を実施しています。

また1994年には、学識経験者、防災関係機関の職員などにより構成される「駒ヶ岳火山噴火災害危険区域予測図作成のための検討会」を設置し、「新たな火山噴火災害危険区域予測図」を3種類(火山学的、行政資料型、住民啓発型)作成して、5町の家庭や防災関係機関に配布し火山噴火災害に備えています。

協議会の事業としては、「壁貼り防災ポスター(3種類)」や「防災ハンドブック(6種類)」を隔年で作成し、5町の各家庭に配布し、住民の防災意識を高め、噴火に備えて、いざというときの準備を呼びかけています。「日頃から駒ヶ岳とはどんな火山か。火山噴火とはどんなものなのか。」を知ることが防災の第一歩であることから、火山学者や火山の専門家の協力のもと、火山防災講演会なども毎年開催しています。また、1994年には「駒ヶ岳が怒った時一備えあれば憂いなし」という火山の防災ビデオを作成し、山麓住民、防災関係機関、学校、図書館等に配布し防災意識の向上に努めています。駒ヶ岳の山麓に住む私たちは、今後とも火山の山麓で「火山と共に生きるまちづくり」を展開して行く宿命にあります。火山は、地域に災害をもたらすという反面、地域に温泉や素晴らしい景観、豊かな資源をもたらしてくれます。このような火山の山麓において、火山災害を防止・軽減し、地域の安全確保と地域住民が安全で豊かな生活を営んで行くために、今後とも駒ヶ岳火山防災会議協議会の活動を進めて行きます。

「災害から、私たちの生命や財産を守る最大の力となるものは、日頃からの私たち自身の防災意義なのです。」

駒ヶ岳火山防災会議協議会事務局

〒049-2393 北海道茅部郡森町字御幸町144-1/森町役場 TEL(01374)2-2181 FAX(01374)2-3244